
第7回公開研究会

テーマ 発達障害と学びの困難

発表者 藤野 博 東京学芸大学教職大学院・
特別支援教育（専門分野：言語コミュニケーション障害）

発表概要

「東京学芸大学こどもの学び困難支援センター」のミッションは「虐待」「貧困」「不登校」です。学びの困難に追い込まれている子どもたちの現状を考え、「発達障害」を課題にしなければならないと、「発達障害と学びの困難」というテーマで研究会をもちました。

今日のテーマは「発達障害と学びの困難」です。自閉スペクトラム症のことが中心になります。

●発達障害とその特徴

学習障害の一種であるディスレクシア（読み書き障害）の成人用のチェックリストを見ますと、多くの質問項目で、読み書きができる／できないという二分法的な表現ではなく、時間がかかる、苦手だ、勘違いするといった表現になっています。通常の学級に在籍している発達障害の子どもたちの読み書きの問題は、苦勞している、疲れる、時間がかかるなどというかたちで現れることが多いようです。

次に、注意欠如・多動症のチェックリストを見てみましょう。これは文部科学省の調査でも使われているものです。しゃべりすぎる、なくしものが多い、気が散りやすいなどの項目ですが、これもできる／できないの二分法ではなく、身近にもこういう人がいるとか、もしかすると自分も当てはまるかもしれないといえます。

次は自閉症の特性を評価する自閉症スペクトラム指数（AQ）という検査の項目の一部をご覧ください。パーティーなどよりも図書館に行くほうが好きなど、これも身近にありそうな内容です。自閉症については、異世界の話といったイメージが世間にはあると思いますが、こうした検査項目を見ると、自分も当てはまるかもしれない、身近にもいる、自分たちの世界と地続きだと感じないでしょうか。

●通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒

文部科学省は10年ごとに通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査を行っており、昨年3回目の調査結果が報告されました。それによると、通常の学級に在籍している発達障害の特徴を持つ児童生徒の比率について、前回調査（2012年）は6.3%でしたが、今回は8.8%と増えています。しかし、現場の声として、もっといるのではないかといった意見もよく聞かれます。

1. 発達障害の主なタイプ

DSM-5という精神医学の世界的な診断基準では、発達障害は神経発達症という名称で記載されています。限局性学習症 (SLD) (いわゆる学習障害 (LD))、注意欠如多動症 (ADHD)、自閉スペクトラム症 (ASD) が発達障害の代表的なタイプとしてよく取り上げられます。

2. 自閉スペクトラム症

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, ASD) は、二つの特徴から診断されます。一つは対人コミュニケーションの問題です。人との関わり合いの困難、会話が上手にできない、表情の理解ができない、人間関係を築くのが難しい、などの特徴があります。

もう一つは、強いこだわりの問題で、行動、興味、活動が限定され反復的だという特徴をもっています。同じ行動や運動のパターンを繰り返す、習慣が変わることへの抵抗を示す、興味関心の範囲が狭い、などです。

3. ASDの評価法：AQ (自閉症スペクトラム指数)

自閉症の特性を評価できるAQ (自閉症スペクトラム指数) という質問紙があります。質問項目が自分にどのくらい当てはまるかを回答し得点化する検査です。

AQで一般の成人に調査した結果、正規分布、つまり釣鐘型の形状を示しました。これは自閉症の特徴は様々な程度で幅広く分布し、その特徴が強い人もいれば弱い人もいることを意味しています。つまり、診断されなくても、その特徴をもっている人がいるということです。

4. スペクトラムとは？

自閉スペクトラムの「スペクトラム」ということばは連続体という意味で、症状や特徴の表れ方が多様であるということを表現しています。スペクトラムとは虹の七色のことですが、虹の色はそれぞれ境目がなく連続してつながっています。そのことに例えてスペクトラムと表現するようになったようです。

自閉症の特徴が強く日常生活に支障をきたし、サポートを要する場合に、自閉スペクトラム症と医学的に診断されますが、その一方、診断されなくてもそういった特徴を持つ人もいます。自閉症の診断はされないまでも、そのような特徴がある人のことを、イギリスなどではAutism Spectrum Condition (ASC) と呼んでいるようです。一方、そのような特徴がない人のことはNeuro-Typical (ニューロティピカル) といい、日本語では定型発達と訳されています。神経学的に典型的という意味です。

5. ASDの有病率と原因

ASDの有病率は、およそ人口の1%です。学的な診断がつくほどではないものの特徴を持つ人も含めると、人口における比率は10%くらい、つまり10人に1人という説もあります。

ASDの原因説として親の育て方の問題だと考えられていた時代もありました。冷たいお母さんに育てられ

ると、人との関わりが持てなくなるというもので「冷蔵庫マザー説」といいます。母親が冷淡なため、愛着の形成ができなくて起こる情緒障害が自閉症だという説です。現在はその説は完全に否定され脳機能の問題だとする認知障害説が定説となっています。

認知障害説の考え方も、脳に損傷を受けて障害が起こるという考え方でなく、定型的でない脳の問題、つまり、脳の構造と機能がユニークで、典型的なパターンとは異なるといった考え方が近年では取られています。

6. ASDと反応性アタッチメント障害／反応性愛着障害

ASDと愛着の問題は区別する必要があります。愛着の障害は医学的に反応性アタッチメント障害（反応性愛着障害）という診断名でDSM-5に記載されていますが、ネグレストや虐待などが原因で、神経発達の問題ではありません。一方、自閉スペクトラム症は先ほど述べたように親の育て方の問題でなく脳の特徴の問題です。自閉スペクトラム症の場合でも、親の育て方によってもともと持っている特徴がいろいろな現れ方をします。良好に発達することもあれば行動や情緒面の問題を示すこともあります。しかし、それは二次的な問題であって、脳の特徴の問題です。一方、愛着障害は育て方の問題です。これは区別する必要があります。

7. ASDの会話の特徴とコミュニケーションにおける問題（例）

ASDでは会話に大きな特徴がみられます。話が一方通行になりがちで、双方向のやりとりが難しいのです。その背景として次のような問題があります。

・意図理解の問題

字義どおりの意味はわかるものの、その背後にある意図がわからないという問題がみられます。たとえばASDの子どもの家に電話をかけるとします。「お母さん、いますか？」と聞いたところ「うん、いるよ」と答えてくれましたが、母を呼びに行く気配がありません。先の質問は母の在宅の確認だけでなく、母に電話を代わって欲しいという意図も含まれていますが、それを察することができないのです。

・情報伝達の問題

相手が知ってること知らないことを判断して会話するのが難しいということです。たとえば鉄道のことに非常に詳しい子がいたとします。鉄道の知識をたくさん知っていますので、クラスのイベントでクイズをつくる係になりました。しかし、とんでもなくマニアックな問題をつくってしまいます。「〇〇線の〇〇車両のシートの横幅は何センチでしょう」というような問題です。クラスのイベントのクイズですので、そこそこ答えられる人もいないと楽しめません。知識レベルをクラスメイトに合わせることもしないと浮いてしまうでしょう。

・丁寧さの調節の問題

相手や場面に応じて話し方の丁寧さを変えることにも問題を生じることがあります。学校の先生には丁寧な口調で話し、クラスメイトにはくだけた口調で話す、上司にはかしこまって話し、後輩にはため口で話す、などです。一方、後輩にかしこまった話し方ではよそよそしくなってしまうですね。そのような相手や場面に応じた丁寧さの調節に困難がみられます。

8. ASDの認知と感覚の特徴

ASDの人たちの世界を考えるうえで認知と感覚の特徴を理解することが重要です。最初に心の理論の問題があります。他者の視点に立つことや意図を把握することの問題です。それから、弱い中枢性統合の問題があります。これは「木を見て森を見ない」という認知の特徴で、細かいところにばかり目が行き全体を概括的に捉えることが難しいという問題です。また、感覚の過敏さや鈍感さの問題もあります。

9. 心の理論とは

心の理論とは何でしょうか。たとえばコップに向かって手を伸ばしている人がいたとします。それはどのように見えるでしょう。ただ手を伸ばしているのではなく、取ろうとしているように見えるのではないのでしょうか。行動の背後に何らかの心の状態があることを想定しているわけです。そのような理解を可能にする認知システムを心の理論といいます。次のようなテストでアセスメントがなされます。「Aさんはボールを箱に入れて部屋を出ていきました。部屋に入ってきたBさんがボールを箱からバッグに移し替え、部屋を出ていきました。また部屋に戻ったAさんはボールをどこに探すでしょうか？」これは「誤信念課題」と呼ばれ、通常の発達をしている子どもでは4歳頃に「箱」と答えられるようになります。しかし、ASDの子どもでは知的な遅れがなくても正答できず、「バッグ」と答えてしまいます。相手の視点に立つことができず、自分の視点で答えてしまうのです。

10. ASD者の心の理論の獲得の問題

そのように、ASDの子どもたちは心の理論の獲得が困難なことがわかっています。しかし、ASD児も通常の発達より遅れますが、言語の発達とともに、誤信念課題に正答できるようになることもわかっています。ただし、テスト場面ではできても、日常的に自発的にできるかということそれは難しいことが多いようです。テストでは、問題に答えるよう指示がなされますが、日常生活では相手の心について考えるよう指示されることは多くなく、その場その場で、自分で判断しなければなりません。促されればできますが、自発的に行うことが難しいのです。

とはいえ、指示があったり促されたりではあっても、できるようになるということはやはり進歩であるといえます。意識的に向かい合えばできる。日常生活で自発的に察することはできなくても、促され考えればできるということは大きな前進でしょう。

11. 心の理論の発達：2つの道筋

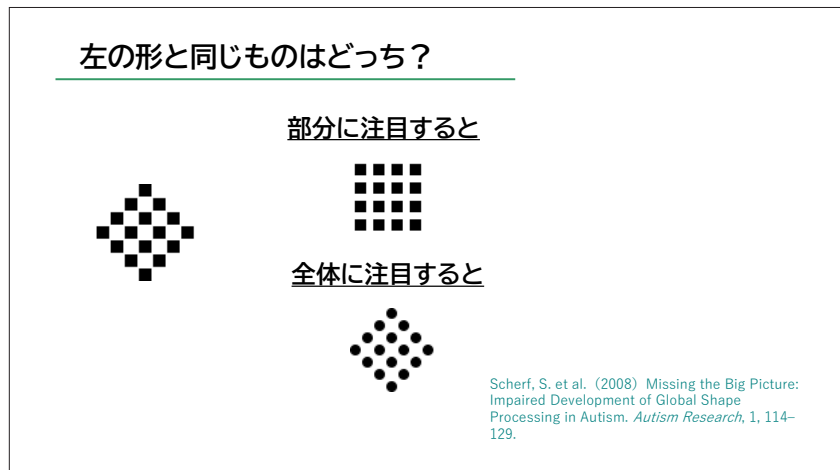
心の理論のテストは定型発達児の場合は、深く考えなくても直観的に正答できます。一方、ASD児の場合、考えて解きます。定型発達児の解き方が自動運転だとするとASD児の解き方は手動運転といえるでしょう。直観的にでなく、ことばと推論で解いているのです。手動運転だと、いちいち意識しなければならないため、かなりのエネルギーが要ります。ASDの人たちは人付き合いにおいて、その都度考えながら、それを行うため、とても疲れるようです。

12. 全体に注目するか、部分に注目するか

こちらの図をご覧ください。左に見本の図版、右の上下に選択肢の図版があります。見本の図は要素が四角で全体がひし形です。右側の上の図は左側の見本と要素（四角）は同じですが全体（四角）は異なります。下の図は、要素（丸）は異なりますが、全体（ひし形）は同じです。左の形と同じものはどれか問うと、定型発達児は全体の形に注目し下の図を、ASD児は部分に注目し上の図を選びやすいという実験の知見があります。

また、こちらの写真をご覧ください。これはハワイの海岸の写真です。この写真をちらりと見せ、その絵を思い出して描いてもらいます。すると、定型発達の人はいきたいこんな感じで描くでしょう。建物があり、歩く人がいて、波打ち際があります。写真に写された情報はもっとたくさんあるわけですが、ポイントだけ取り出すとこの絵のようになります。情報を振り分け、枝葉を刈り取り幹だけ残しているのです。

一方、ASDの人たちはそれが困難で、見たものを見たとおりに描こうとしてしまいます。枝葉までとても細かく描いてしまうのです。放浪画家で有名な裸の大将で有名な貼絵画家の山下清さんは、自閉症の特性を持たれていたようですが、一度見ただけで細かいところまで再現して描ける能力を持たれていたようで、その作品は、目の前でスケッチしたものでも、写真を見ながらでもなく、記憶だけで創作していたことが伝えられています。山下さんの場合、芸術家としてその特性を生かすことができましたが、日常生活では見たものを適当にふるい分けないと、情報の洪水で混乱が生じてしまうかもしれません。



13. ASDの認知特性と学校生活

小学校に入学する前の子どもに学校ってどんなところ、と聞かれたら何と答えるでしょうか。たいていは勉強するところ、友達がいる、先生がいるの3点くらいではないかと思います。これでいたい事足りません。子どもたちも実際に学校に行ってみたらだいたいそんな感じだと思うことでしょう。

しかし、ASDの子はこうした説明では納得できないことがあります。学校生活には、その他にも休み時間や給食やその他のイベントなどがあり、それらについての説明がなされないことに不満を感じるといったことです。それらは学校生活の中でどちらかというと枝葉の事柄で、幹になるのは勉強だとみなされますので、定型発達の子もたちの場合、その説明でたいていは納得してもらえますが、ASDの子もたちはそれでは情報が足りないと感じるようなことがあります。

とても細かいところまで気になり、大雑把な説明では納得できないという傾向は、「木を見て森を見ない」という弱い中枢性統合と関連していることが考えられます。

14. ASDの子どもの学習面の困難

ASDの子どもの学習面の困難について述べます。長文読解問題が苦手なことが多い、作者の意図を把握することが難しい、特に国語では作文が苦手な子が多い傾向があります。また、穴埋め式の問題や選択肢から選ぶ形式の問題にはスムーズに答えることができますが、「なぜ」などの理由を問う問題には答えにくいようです。答えがひとつに決まっていない問いのことをオープクエスチョン、答えがひとつに決まっている問いのことをクローズドクエスチョンといいます。ASD児は概してオープクエスチョンは苦手で、クローズドクエスチョンは比較的得意という特徴をもちます。

15. ASDの学習の困難の認知的背景

先に述べたように、ASD児は作文が苦手なことが多いのですが、その理由について考えてみましょう。作文を書くとき、まず話題を探します。たくさんの情報の中から、話題の中心になるようなことを選びます。これは幹と枝葉をより分ける作業で中枢性統合の働きが求められます。また、書いた文章を読み返してみ、読み手に伝わるよう書き直すことも大切です。これは読み手の視点に立って考えることで、心の理論の働きが必要でしょう。そのように心の理論と中枢性統合が作文には必要です。そのいずれにも問題を抱えるASDの子どもの作文の苦手さは認知的背景から理解することができます。

16. ASDと情緒の問題

ASDの児童が不安やうつなど情緒的な問題を抱えるリスクは、定型発達児と比べて20倍という知見があります。不登校もよくみられます。いじめや学業の困難などの問題が多いようですが、ASDの子どもの精神的な成長もひとつの要因としてあるようです。それは心の理論の発達に関係します。

ASDの子どもの発達とともに心の理論の獲得ができることを先に述べました。知的な発達の遅れがない場合、だいたい9歳頃です。心の理論の獲得は他者の視線に気づくことに関係します。それまで、そういう意識が乏しかった頃には気にならなかったことが、自分はどう見られているのかということに気づき始めます。そして、自分はほかの人と違うのではないか、変に思われてるんじゃないか、など被害感情が強くなります。そのように、心の理論の獲得は成長なのですが、一方で情緒の不安定さにつながる恐れもあることは注意する必要があります。

また、不登校についてですが、ASD特有のこだわり、行動の切り替えの困難さが不登校を固定してしまうことがある反面、学校とは毎日きちんと通わなければならないという規範意識に縛られて、つらくても登校せざるを得ないという状況においてしまう場合もあります。学校には通っているけれど実は苦しい状態だということもあるということです。登校できているからというだけで問題がないとは言い切れないのです。

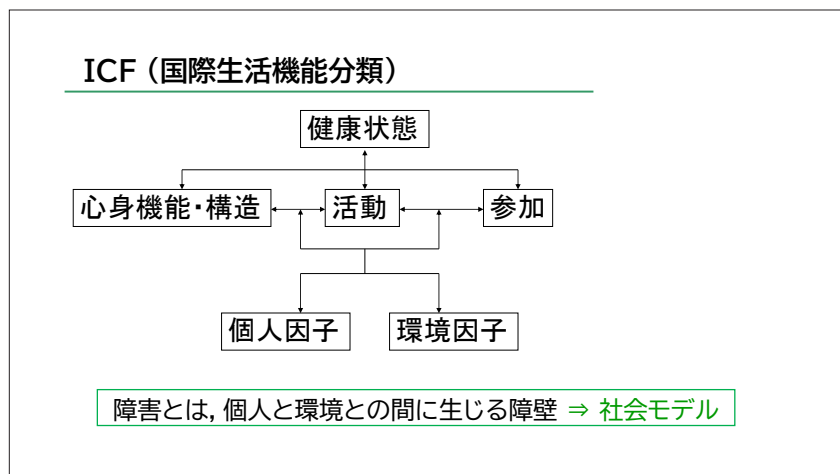
17. 発達障害と二次障害の予防

発達障害の支援において重要なことは二次障害の問題です。二次障害の予防ができればその子への支援は半分以上達成できたといってもよいでしょう。ポイントになることは失敗経験を減らすことで、できないことばかりに目を向けず、強さや良さなど、子どものもつ特性を前向きに評価し支援につなげることです。

18. ASDの支援のポイント

・SPELL

ASDの人への支援のキーワードでSPELLというものがあります。イギリスの自閉症協会が提唱したものです。Sは“Structure”で「構造化」です。環境を整え、見通しをもてるようにする支援を行います。Pは“Positive approach”で「肯定的な対応」です。先ほど述べたできないことよりもできることに目を向けることです。Eは“Empathy”で「共感性」です。例えば、共有できる話題や活動を探し、一緒に楽しんだりすることで孤立感を和らげます。次に、最初のLは“Low arousal”で「刺激の低減」です。うるさくない環境にする、照明を和らげるなど、感覚の過敏性への配慮です。そして、もうひとつのLは“Links”で「関係者の連携」です。関係者が子どもの課題や配慮のポイントなどについての認識と方針を共有し連携することは重要です。



・構造化と視覚的な支援

SPELLの中でも特にASDの人たちにとって支援のポイントになることは構造化です。何をどこで行うのか、どういう順序で行うのか、など見ただけでわかるように環境や課題の設定の仕方を調整します。見通しが持てるようにタイマー、スケジュール表、手順表などがよく使われます。

物理的な環境調整だけでなく、コミュニケーション面でも意図が伝わりやすいよう表現の工夫をします。具体的に曖昧さがないように伝えることです。先ほどの電話の例でいうと、

「お母さん、いますか？」だけでなく、「お母さんがいたら電話をかわってね」と明確に伝えます。

図、絵、文字など視覚的な情報を効果的に使うことも大切です。それを視覚支援といいます。話し言葉の場合、話している相手に注意を向けないと情報が入ってきません。定型発達の子の場合は、先生が話せば一斉に耳を傾けるでしょう。しかし、ASDの子の場合、相手に合わせる事が苦手なので、話している瞬間に耳を傾けないことが少なくありません。声の情報は一瞬で消えてなくなってしまうので、そのときに注意を向けていなければ何も残りません。それに対して、視覚的に示された情報は一瞬で消えず、目の前に残っています。そのため、相手に合わせることなく、自分のペースで情報を取得しやすいのです。

以上のように、認知の特性に合った環境づくりをすることがASD子どもたちの学びの支援にはもっとも重要なことといえるでしょう。

